公益財団法人　埼玉県剣道連盟『広報誌』

剣風

公益財団法人
埼玉県剣道連盟

事務局　〒330-0074
さいたま市浦和区北浦和5-6-5
浦和合同庁舎4階
Tel (048)834-8869
Fax (048)834-8879
http://www.saitama-kendo.or.jp
（編集責任者　豊島正夫）

第４号　平成25(2013)年６月28日発行　　（題字　野澤　治雄会長）

巻頭言

秩父神社と当社奉納埼玉県下武道大会

秩父神社　宮司　薗　田　　稔

かつて人生五十年と人口に膾炙（かいしゃ）したように、半世紀におよぶ本大会の歴史は人の一生にも等しい貴重な伝統といえましょう。

かえりみれば、大東亜戦争の敗戦とその後の占領軍政とによって蒙った文化的混迷の未だ癒えぬ世情のさなか、日本古来の伝統や美風を体現する武道を復興し称揚しつつ、もって次代を担うべき青少年の健全な心身を育成することを期して、昭和33年の初夏に第１回の本大会を秩父神社の広庭で開催し、爾来連綿と同大会を重ねて、本年で第55回を迎えました。

当初の発端を記録する文書などを瞥見（べっけん）いたしますと、先代宮司をはじめ当時の神職たちの想いは、遠く鎌倉武士団の一源流たる秩父平氏が武神として篤く尊崇した、秩父妙見宮の土地柄なればこそ輩出した武道の先人たち（近代では当社ゆかりの、故髙野佐三郎範士など）の偉業を継承しつつ、青少年の全人的育成に資する三道（剣道・弓道・柔道）の伝統と美風とを再興して大前に奉納することが、広く当社のご神意にも叶うということでした。

さいわいに当時の地元をはじめ県下の剣道・弓道・柔道各連盟の関係各位そろってのご理解とご参加を賜わり、また秩父セメント株式会社（現・秩父太平洋セメント）の全面的なご支援もあって、その後年を重ねるごとに盛大な大会に育て上げることができました。

おかげさまで、近年は新緑したたる絶好の季節のもと、４月29日（昭和の日）剣道・弓道大会、５月３日（憲法記念日）柔道大会の二日間にわたる本大会には、埼玉県内の各地から小中高の児童生徒から成年男女にいたる試合参加者たちが、各会場に満ち溢れるほどのまことに活気ある大会となっております。

これもひとえに、当社ご祭神のご加護もさることながら、過去50有余年の永きにわたり県下各武道連盟の世代を重ねた指導者の方々の変わらぬご奉仕とご尽力、地元関係各位の暖かいご協力あってのお蔭と心より感謝し、喜びとするところであります。

そして、平成19年、特に三月十五日の佳き日を選び、本大会が大きな節目の記念すべき50回を迎えるに当たり、ご関係各位の参列のもと当社大前に記念奉告祭を斎行し、合わせて三道による神前演武の後、功労者の記念表彰式並びに祝宴を催し、この慶事を記念して本大会に、当時ご参加の三道関係者各位の総奉賛により、当社の奉額殿に立派な懸額をご奉納いただきましたことは、記憶に新しいところであります。

さらに、一昨年の東日本大震災に伴う、大会史上初の開催中止は、私達に自然災害の凄まじさと課題を残しました。

結びに、当社に対するご関係各位の、先人武道家に劣らぬ篤いご尊崇に、深甚の敬意を表し、剣道連盟の益々のご発展を祈念し巻頭言とさせていただきます。

平成25・26年度　公益財団法人　埼玉県剣道連盟役員（順不同）

名誉会長　大久保和政　　相談役　水野　仁　　顧　問　鋪野　猷爾・茂木　廣次
会　長　野澤　治雄（上　尾）
副会長　○根岸　一雄（東松山）　○山中　茂樹（加　須）　○関口　善行（深　谷）　○豊島　正夫（浦　和）
専務理事　○佐藤　義則（浦　和）
理　事　○増田　吉男（草　加）　○矢部　勇介（越　谷）　○戸賀崎正道（久　喜）　並木　欣次（幸　手）
尾﨑　勝美（川　越）　○藤牧　守芳（飯　能）　○栗原　憲一（狭　山）　○吉野　英明（東入間）
小倉順二郎（川　口）　中村　好一（大　宮）　○青葉元由紀（北　本）　○池田　克生（秩　父）
鶴間　信好（熊　谷）　○加治屋速人（警　察）　○齋藤　茂樹（高　校）　○三日尻幸治（居合道）
○瀧澤　利行（杖　道）　（※以上会長以下理事23名、○印は業務執行理事17名）
監　事　大室　泰二（狭　山）　會田　紳次（浦　和）
評議員　中村　豊孝（八　潮）　増田啓三郎（吉　川）　長谷川裕一（春日部）　齋藤　亘弘（杉　戸）
秋谷　庫治（羽　生）　加藤　輝男（行　田）　島崎　隆男（所　沢）　吉井　一祥（入　間）
渡邉　榮作（西入間）　新井　弘己（小　川）　八谷　忠巌（川　口）　奥田　良一（　蕨　）
藤田　利雄（戸　田）　千葉　光三（朝　霞）　天沼　秀夫（鴻　巣）　清水都留吉（寄　居）
韮塚　雅司（本　庄）　井戸川英進（小鹿野）　小室駿一郎（浦　和）　穐田　清（大　学）

業務執行理事会（４部会）担当者一覧

①総務部会　◎関口　善行、戸賀崎正道、青葉元由起、矢部　勇介
②公１部会　◎根岸　一雄、栗原　憲一、吉野　英明、増田　吉雄、三日尻幸治
③公２部会　◎山中　茂樹、藤牧　守芳、加治屋速人、齋藤　茂樹
④広報啓発部会　◎豊島　正夫、池田　克生、瀧澤　利行　（※◎は部会長）

「大会記録この1年」（2013年前期）全国大会（上位）入賞結果・県予選会結果（報告）

順不同

――全国大会予選会――

○全日本都道府県対抗剣道優勝大会予選会（２・３）
先鋒　小林幸平（埼玉栄）　次鋒　齋藤勝将（朝霞）
五将　橋本桂一（東松山）　中堅　翠川洋平（上尾）
三将　米屋勇一（警察）　副将　内田貢市（東松山）
大将　大澤規男（警察）

○全日本都道府県対抗女子剣道優勝大会予選会（４・14）
先鋒　岡崎愛美（淑徳与野）　次鋒　田中尚子（上尾）
中堅　荒井貴子（久喜）　副将　市村麻美子（朝霞）
大将　栗田幸枝（高校）

○全国健康福祉祭剣道交流大会予選会（４・14）
先鋒　久保和秀（西入間）　次鋒　谷　健治（上尾）
中堅　菅村孝俊（春日部）　副将　渡辺秀男（東松山）
大将　小野寺斌（朝霞）

○第68回国民体育大会予選会（５・25）
・**成年男子**
先鋒　足立柳次（警察）　次鋒　嶋田貴文（警察）
中堅　米屋勇一（警察）　副将　金子信昭（高校）
大将　加治屋速人（警察）
・**成年女子**
先鋒　濱本佳菜子（警察）　中堅　本郷利枝（高校）
大将　市村麻美子（朝霞）

○第55回全国教職員剣道大会予選会（５・25）
・**団体戦出場者**　木野内悠介（共和小）　植竹倖希（かしの木特）
森田一成（浦和高）　金子信昭（白岡高）　吉長英二（市立浦和高）
・**個人戦出場者**　木野内悠介　森田一成
・**女子個人戦出場者**　萩原愛子（越谷東中）
荒井貴子（蓮田南中）－前年度優勝者枠－

○全日本女子剣道選手権大会県予選（６・２）
①鈴木愛梨（高校）　②濱本佳菜子（警察）　③村山千夏（警察）

○全国高校総合体育大会予選会（６・17、18）
・**男子団体**　①本庄第一　②市立川口　③浦和　④埼玉栄
・**女子団体**　①淑徳与野　②埼玉栄　③伊奈学園　④蕨
・**男子個人**　①星野直樹（本庄第一）　②元吉雄弥（埼玉栄）
・**女子個人**　①尾関奏（淑徳与野）　②辻本　葵（淑徳与野）

――関東大会――

○第60回関東高等学校剣道大会（６・８、９）
・**女子個人**　②辻本　葵（淑徳与野）　③端真璃華（埼玉栄）
☆優秀選手　男子　星野直樹（本庄第一）　女子　辻本・端

――関東大会予選会――

○関東高校剣道大会予選会（４・30、５・１）
・**男子団体（出場校）**本庄第一　埼玉栄　市立川口　立教新座
浦和　大宮東　熊谷　鷲宮
・**女子団体（出場校）**淑徳与野　久喜　市立川口　ふじみ野
市立川口総合　昌平　埼玉栄　本庄第一
・**男子個人（出場者）**小林幸平（埼玉栄）坂本竜雅（本庄第一）
長谷川哲哉（春日部）埜口一生（伊奈総合）小室雄一（市立川口）
青木俊太郎（市立川口）
・**女子個人（出場者）**岡崎愛美（淑徳与野）端真璃華（埼玉栄）
渡辺真央（本庄第一）辻本　葵（淑徳与野）原　梨穂（市立川口）
牛山直美（久喜）

「我が師を語る」—諸貫五三郎先生と不動岡高校剣道部—

教士七段　清水　祐介(昭和36年度卒業)

昭和33年　インターハイ（秋田）
準優勝

昭和34年　国民体育大会（八王子）
準優勝

私が昭和33年４月不動岡高校へ入学し、あこがれの剣道部に入部したころは、３年連続でインターハイ出場していた強豪剣道部であった。その先生が「諸貫五三郎」であります。大きな体で道場に立つ姿はまるで大きな山のようでした。その風貌からさぞかし怖い先生と思っていたところが、剣道部の運営や稽古方法まで、部員の自主性に任せており、しかも短時間の稽古時間で終わらせていた。

その年、私はまだ１年生でしたが補欠に入りました。３年生が非常に結束し、インターハイに出場し、しかも全国第２位の偉業を成し遂げたのです。そして翌年私も２年生で先鋒に使ってもらい国体に出場し、これも第２位になりました。どうしてこんなに力が出たのだろう。

諸貫先生は温厚で「五三（ごさ）やん」の愛称で親しまれ、道場ではただ、岩の如く打つ、正に、無言の教え、体で教える先生であった。

私が３年生のときのインターハイ埼玉県予選では、決勝の大将戦で場外反則で負け、連続出場が途切れてしまいました。

そのときも何も言わずに温かく見守っていただきました。それがいまでも忘れられません。

先生に何か尋ねると、「そりゃー駄目だい」の一言であった。

先生は正に武道家であり、「剛の者」でありました。昭和42年の埼玉国体は優勝したが、先鋒藤倉二三男（昭41年卒）次鋒清水祐介（昭36年卒）の２名が選手として出場した。これも諸貫先生の教えであると思っています。不動岡高校の校訓は「質実剛健」、「不動精神」でありますが、この精神が諸貫先生の指導により、脈々と受け継がれているものと思います。感謝しております。

＊同窓のOBから一言

◇教士七段　秋谷　庫治（昭34年卒）

私達の師、諸貫五三郎先生は、行田市(埼玉1202)より自転車又は原付自転車で不動岡高校まで通われておりました。私達は１年生時より３年生まで放課後稽古をつけて頂きました。先生の稽古はそれ程きつい稽古ではなく、面鉄の奥からにこやかに笑いながら指導してくれました。先生の温厚さが感じられました。３年生の時、秋田市で開催された第５回全国高等学校剣道大会に出場し、準優勝出来た事は、先生の指導のお陰かと思っております。私は一農家です。高齢者になりましたが、健康に留意して「農士道」精神で先生の教えを伝えて行けたらと思っております。　感謝

◇教士七段　中村　治夫（昭35年卒）

昭和33年インターハイ前の暑中稽古時に、あの口数少ない先生が後にも先にもただ一度、鬼の形相で烈火のごとく怒った。

卒業して東京の私大剣道部に在籍している先輩が同期数名を連れて指導稽古にみえたときである。途中入場してきた先生が突如元立ちの先輩達に向かって「貴様ら何様のつもりだ。もっと真面目にやれっ」と一喝したのだ。道場の空気は凍りついた。私は先輩たちの傍若無人な剣道を見てこれが大学の剣道かと疑念を抱いた瞬間であったので、この一喝が光明であった。数分の気まずい沈黙の後、再開された稽古は見違えるものと化した。

先生への最大の思い出である。

◇教士七段　戸賀崎正道（昭38年卒）

諸貫五三郎先生は、身長180cm位、体重100kg超の体躯で、一見怖そうに見えた先生だが、３年間の剣道部生活で怒鳴られたり、叱られたりした記憶が殆どない。

先輩達が諸貫先生のことを「五三やん」と言っており、自分達の同期の仲間も「五三やん」と言うようになるのに、時間がかからなかった。今思えば、稽古では引き立て稽古が大変上手く、先生に操られるままに自然に技を出し、体当たりも、しっかり受け止めてくれ、ごく自然に足腰が鍛えられたのではないかと思っている。良い技、良い打ち方をした時、面金の奥で「にやっ」とした先生の顔が未だに記憶に残っており忘れられない。

私の修行時代　「警視庁剣道部で過ぎた日々」

教士八段　佐藤　安治
（埼剣連審議員）

私が剣道をはじめたのは中学からで、その後、宮城県では名門と云われる小牛田農林高校に進み、本格的な剣道修業のスタートを切った。高校の恩師、高橋要先生とその師乳井義輝先生、良師に恵まれ、数多くの大会・試合に起用され、３年間の高校時代を送ることが出来た。

当時の高校の道場は、何故か窓ガラスが無く、冬は前夜吹き込んだ雪を掃き出し朝稽古を続けたことが懐しく想い出される。厳しい高校時代だったが、２年生の秋田国体（昭和36年）での優勝等実り多き３年を送ることが出来たのも良き先輩と同僚に恵まれたからである。

中でも、千葉仁範士は小学校からの同級生であり、私の剣道人生でかけがえの無い友人であり、いろいろな面での師でもある。

その後、彼と共に警視庁に入り、一年間の警察学校生活を終えて機動隊に配属となり、昭和39年３月から、対外試合候補（特練）に指定された。千葉範士は全日本選手権大会３回優勝等の輝かしい活躍をしたことは、皆さんご存知のとおりである。

私は、昭和41年に「武道専科」という、柔剣道を始めとする術科の専門的な指導者を養成する一期生として入校した。担当師範の小川忠太郎先生、教師の谷崎先生のご指導のもと、剣道はもとより、古流（一刀流）、居合道、杖道、座禅、一般教養と多岐に亘るものであった。この武道専科は全員武道館に宿泊し、中でも一刀流の組太刀、一刀本の稽古は夜中２時から６時迄行われ、朝食後の９時から午前中の稽古、そして午後の稽古と、これが一週間続いた。まるで夢遊病者の様に居眠りしながら稽古したことを想い出す。

武専を卒業して特練に復帰し、厳しい訓練の再開となった。とりわけ、特練での稽古の想い出の最たるものは、２時間の立切稽古で、ご存知の方も多いと思いますが、懸り手は何でも有りで、元立をいかに早くギブアップさせるかというものであったが、その年の監督は森島先生で、私をはじめ３人の元立には「死ぬ気で立て」、懸り手には「最後迄立たせたら承知しないぞ」と云う凄まじいものであった。

季節は７月、始まって40分位で先輩の一人が潰れ、残りは私と渡邊哲也先輩（範士）で、何とかその荒業を乗り切った。その時の２時間は、始まって30分位で足がつりそうになり、一時間位では意識朦朧となったが、ところが、あと30分位になると勇気が湧いてきて、なんと身体がだんだん動き出した。立切で得た貴重な体験であった。この後もう一度立切を経験したのですが、今日あるのもこうした厳しい警視庁の稽古環境のお陰と心から感謝している。

明治10年、西南の役での警視庁抜刀隊の活躍が警視庁武道の始まりであったと聞いているが、以来全国から著名な武道家を登用、現在に至っている。現在の稽古状況は、朝稽古７時から40分間、そして午前、午後の稽古と一年を通して続けられている。朝稽古は一般の参加も多く、盛況である。

その後、指導室にあって、助教・教師・師範へと立場を変えながら、選手としての活躍を目指す意識の高い特練生との充実した稽古を心がける中で、当然、自己の健康管理への気配りも日々大切にしたところであった。

昭和57（1982）年10月から６ヶ月間、全剣連の派遣でドイツへの指導の機会を得た。以来、このご縁でたびたび指導の機会があり、今回（５・14～５・29）が８回目の訪問となったが、現地剣士たちの学ぶ姿勢や真剣な眼差しを受け止めては心打たれるものがある。

指導者の資質が問われている昨今、一層気を引き締めて後進の指導に当ることが恩師並びに暖かく迎えていただいた埼剣連の恩に報いることと思いを新たにしているところです。

昭和41年　武道専科一期生（前列左に私）

埼玉の剣道

「神道無念流戸賀崎熊太郎暉芳の遺訓」

神道無念流宗家八世　戸賀崎正道
（久喜剣道連盟会長）

1　はじめに　神道無念流が現代剣道に与えた影響は、かなり大きいと言えよう。例えば、構え方においては、現代剣道の中段の構えが、相手に対して剣先の延長は顔の中心または左目、刃の向きは真下に対して、神道無念流では、半身平晴眼で剣先の延長は、相手の左目、刃の向きは左斜め下、右上段の構えは、現代剣道が、剣先は正中線約45度後上方に向けるのに対し、神道無念流では、剣先は正中線上、ほぼ真上に向けて構える。また、正面の打ち方においては、現代剣道でいう打ち切る（捨てて打つ）に対し、神道無念流では、刀勢鋭く打ち切ると教えられている。

2　神道無念流の創始者と戸賀崎家の家系　神道無念流の創始者は、福井兵右衛門嘉平で現栃木県下都賀郡壬生町出身で一円流を牧野円泰に学び、よき師を求めて諸国を武者修行に出向いたものの、自らの意にかなう人に出会えなかった。しかし、信州戸隠の飯縄の神が霊験あらたかであると聞き、飯縄大権現に参籠すること50日、不思議な老人との体験をもとに剣の奥義を悟り、一派をたて神道無念流と称した。また、戸賀崎家の家系は遠く新田義貞から出て、一時は武州菖蒲領戸賀崎城の城主となって戸賀崎を氏とした。天正９年（1581年）戸賀崎隼人義氏が、清久に来て帰農し、隠れ郷士となった。その義氏から数えて８世（一説には９世）が初代戸賀崎熊太郎暉芳である。

3　初代戸賀崎熊太郎暉芳（1744年～1809年）　名を暉芳、号を知道軒と称した。元右衛門を父として延享元年１月１日武州埼玉郡上清久に生まれ、幼少から武士の出という誇りに加えて人並はずれた体格と負けん気が、剣術への関心が高く、いつも木を削っては木刀を作り、剣術の真似事をして遊んでいたという。剣術に対する情熱を制しきれず、16歳にて父の許しを得て、江戸に出て、四谷に道場を開いていた神道無念流福井兵右衛門嘉平に入門した。円熟の境に達していた流祖のもとに弟子入りした熊太郎は、強大な体格と人の倍の稽古熱心さによって、めきめき腕を上げ21歳の若さで皆伝の印可を受けた。これにおごることなく、その後７年間諸国を修行して歩き、郷里に帰って道場（８間×４間＝32坪）を開設し近隣の子弟の教導にあたるようになった。道場開設後、上清久の田舎で近隣の子弟を教導しながら江戸に出る機会を窺っていた熊太郎は、安永７年（1778年）チャンス到来とばかりついに出府し、江戸裏二番町（現千代田区麹町二番町）の門奈孫一郎の敷地内に道場を設けて、「神道無念流戸賀崎熊太郎暉芳」の名乗りをあげた。ときに熊太郎35歳であった。この江戸における道場の門人は、3,000人と言われているが、門人帳が現存していないので確たる証拠はない。しかし、現存する天明の復讐実録（百姓のせがれに親の仇討ちをさせた記録）にある、仇討ちを成就させたことが当時の江戸市中の評判になって入門者が激増したことが推察できる。この、天明の復讐実録をもとに、フランス在住の剣友好村兼一氏の執筆によって小説「神楽坂の仇討ち」が、平成23年４月１日「廣済堂あかつき」から出版されているので是非ご一読願いたい。その１年前には、神楽坂の郷土史研究家で作家の山口則彦氏によって講談用に書き下ろされた「百姓誉れの仇討ち」は、真打ち講談師神田織音女史（剣道２段）によって演じられている。また、熊太郎は神道無念流の起源や修行態度から心の持ち方までを教え諭した「壁書」を道場に掲げて道場訓とした。その内容は240年後の今日でも十分通用するものと考えられるので、原文のまま紙面の都合で抜萃して紹介する。

神道無念流演武場壁書（抜萃）

天下のために文武を用いれば治乱に備うるなり。一治、一乱は世のならわしなれば、治にも乱を忘れずとぞ。されば武芸はしばらく廃すべからざること、いわずして知るべし。（中略）そもそも剣は死生を瞬間の間に決する技なれば、その法をくわしくせずんばあるべからず。（後略）

一、武は戈を止むる義なれば、少しも争心あるべからず。争心ある人は必ず喧嘩口論をな

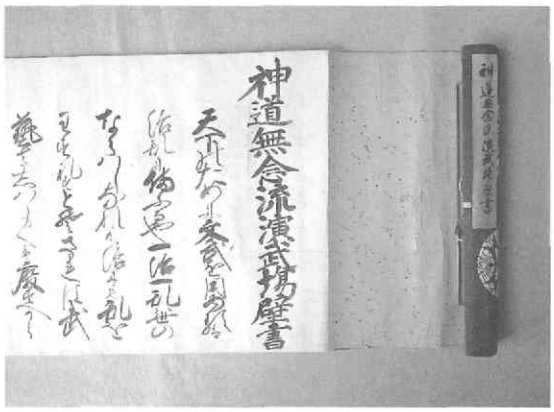
す。（中略）剣を学ぶ人は心の和平なるを要とす。されば、短気、我慢なる人はかえって剣をしらざるをよしとす。

一、（前略）戦陣君父の仇の如きに用いれば義のあるところなり。これすなわち武の徳なり。

一、他流をそしるべからず。（中略）およそ長を争い、誉れを競うは、いやしき心なり。

右（上記）の条々天銘心肝ものなり。

神道無念流の心得（抜萃）



この家伝書は、精神論から技術論にいたるまでこと細かく記載されているが、ほんの一部を抜萃紹介する。

（1） 姿勢のこと　姿勢は自然の体を失わざるに在り。直立して脚を踏み開き、顔は仰がず、俯せず、左右に傾くべからず。仰ぐも俯すも敵の動静よく見えず俯すとき、敵をして撃ち易からしむ不利あり。肩にも腕にも力を入れずして刀を執り、胸を出さずして腹を出し腰を屈めず膝にも力を入れず、敵に真向となり、縦にも横にも大山の如く堂々として雄偉なる姿勢を持つべし。唯剣をとるときのみならず、常に心懸くべし。

（2） 足の踏み方のこと　常に歩行するときの如く、足を踏み開き両脚の関節を和らげ、僅かに膝をまげ、左右の足の爪先に力を入れて踵を浮かし両脚は踏みて踏まず、宙を歩むが如く軽く歩めば、前後左右進退跳躍意の如くなるべし。左右何れも伴って運ぶべし。

（3） 眼のつけ方と二種の観方のこと　大体敵の顔面に注目すれども一定の部位に固定するにあらず、敵の頭上より爪先まで一目に視、目球は動かざるようにすべし。一体を見るなかにも、特に重きを置く点二つあり。一つは剣尖にして一つは拳なり。また、敵を見るに、敵全体を一目に観ると、一部分を観ると二つあり。敵全体を一目に観るときは眼目手足の動静悉く心に入り来る。是れ斯道の大切な見方なり。一部分のみを注目するときは、その部分よく見えれども全体の挙動を知るに能わず。故に、常には全体を視、必要に応じて一部分を見、忽ち全体を見る視方に立ち帰ること。恰も中段を常とすれば、敵に隙あれば直ちに打ち込み、打てば直ちに元の中段となる如く大観すべし、偏見すべからず。

加盟団体紹介（その④）

秩父剣道連盟　－少年剣道の向上と生涯剣道を目指して－

会長：浅見　真一　　事務局長：吉田明夫

1　秩父剣道の現状と課題　秩父は、剣聖高野佐三郎先生の出生の地です。秩父神社の西側入り口を入った左手には、「頌徳碑」が建設されており、その北方には先生誕生時に産湯として使用された井戸もそのまま保存されています。未だ訪れていない会員諸氏にあっては是非一度見学されてみてはいかがでしょうか。

さて、そんな歴史を持つ当連盟は、昭和28年12月秩父剣道連盟として発足、昔から剣道の盛んな地域であることから、全国各地より遠征稽古に訪れる剣道愛好家等も多く見受けられる昨今であります。

現在の会員数は、約100名と一時期より若干の減少があるものの少年指導を中心に日々稽古に精進し、毎週水曜日には、一般会員の合同稽古会を行っております。特に秩父地域における少年剣道は、県内でも高いレベルに位置しているものと自負しております。少子高齢化率の高い地域の割には、各道場同士良い意味で切磋琢磨し、少年剣道の普及に努めております。各道場指導者の並々ならぬ努力に感謝せずにはいられません。

今後は、秩父地域に根ざす若手指導者の育成が急務であり、永い目で剣道の発展に携われる人材の確保が我々に課せられた大きな責務であることを自覚し、一般社会人の剣道愛好者から剣道大好き人間を多く誕生させたいものと考えております。

2　主な活動状況　毎年１月元日の元朝稽古（がんちょうけいこ）は昭和35年より継続されていると聞いております。今年も多くの剣士が秩父神社の境内に参集、稽古後は新年を祝い、１年間の目標を心に誓い正式参拝を済ませた後、家路に向かい、それぞれの2013年がスタートしました。

次に、秩父神社奉納・第55回埼玉県下武道（剣道）大会を去る４月29日（昭和の日）秩父市文化体育センターにおいて開催しました。現在の試合種目は中学、高校、一般の各男女の団体試合で、今年は約700名の選手が出場しました。特に最近の傾向として、一般男子団体戦の出場チームが多くなり、打倒「県警」を合言葉に白熱した試合

が展開されました。今年も埼玉県警機動隊が優勝を飾ったわけですが、何より毎年欠かさずに出場していただく事に心から敬意と感謝を申し上げます。今後も継続出場を是非ともお願いします。

また、秩父の老舗デパートである「矢尾百貨店」には、少年剣道大会のご後援をいただいており、今年の７月の大会で第26回目を迎えることになります。「矢尾杯」奪取は、少年剣士の大きな憧れとなっており、青少年の健全育成と剣道の発展に大きな一翼を担っていただいております。

このほかにも各種の催しを計画しておりますが、次代を託す青少年の育成に重きを置き、さらには我々一般人も新たなる剣道の良さを理解し、志高く生涯剣道を楽しみたいものと考えております。

結びに、埼玉県剣道連盟会長野澤先生、同副会長根岸先生が秩父出身ということで、秩父剣士一同大いなる喜びと誇りを感じております。両範士にあっては、埼玉県更には日本剣道界発展のため益々ご活躍されます事を心からご祈念する所存でございます。

川越市剣道連盟　－外柔内剛の剣士めざして－

会長：尾﨑　勝美　　事務局長：中野　　茂

江戸時代の川越は徳川親藩として代々譜代大名が川越藩主となった。明治になってからも城下町としての気風は残り、武道は熱心に取り組まれた。剣道の指導者としては、直心影流免許皆伝を受け川越藩剣術教授方となった阿部親尼が維新後も青少年の剣道教育を実践された。その後、川越明信館道場を拠点に間中龍吉、阿部朔次郎、間中鹿太郎範士、北村博學範士、古谷加能登範士、藤原三人範士、水野仁範士といった優れた指導者が輩出し、今日の川越剣道界を牽引してきた。

川越市剣道連盟は昭和30年に結成された。平成17年には創立50周年を迎え、賑やかに記念式典や記念大会を行ない記念誌も発行した。明後年には創立60周年を迎える。現会員数は200余名である。

一年の行事を見ると、先ずは新年の元旦稽古を行い、近隣剣士を交えて百余名の剣士が川越武道館に集まる。３月にはライオンズクラブ主催の剣道大会を剣道連盟が全面的後援で実施。５月の武道大会では剣道、柔道、弓道の三道が一堂に会しての大会となる。６月は剣道初～三段の審査会、一千人余の受審者が集まる。７月末には川越の姉妹都市である福島県棚倉町と剣道親善交歓会を行なう。もう40回を超える交流だ。10月には市民体育祭・剣道大会を実施。11月の川越剣道祭〈北村杯争奪戦〉、今年は24回目の実施となる。

今年の連盟独自事業として審判講習会を実施する。それも年間に４回、大会審判の充実を期して行う考えである。その内１回は審判経験のない初心者を対象にした講習会にする予定でいる。

当連盟では、平成12年よりＢ４版の連盟広報紙『川剣連通信』を年４回発行している。連盟行事の報告やお知らせを中心にした記事を掲載しているが、全会員に配布。平成25年３月発行分で52号を数える。

川越の剣道はよくおとなしいといわれる。これは揶揄も含めて言われる言葉であるが、最近は、川越の剣士たちも全国規模の大会で優勝や入賞を重ねるようになって、その刺激は他の剣士にも波及し始めている。外柔内剛の新しい剣士の登場を大いに期待しているところである。

大宮剣道連盟　－更なる飛躍に向けて－

支部長：田井　伸彦　　事務局長：西尾　　工

１．沿革　武蔵一宮氷川神社に於いては、昭和初期より奉納武術大会が行われ多くの武術家により演武が披露されておりました。

本連盟は、戦後のしない競技での剣道再開に伴い昭和25年に大宮剣友会として発足し、のち昭和28年に大宮剣道連盟と改称されました。

その後、政令市としての合併を経て平成19年より旧岩槻支部・岩槻地区が加わり、現在に至っております。

２．活動状況　加盟団体は紙面の都合で列記できませんが、現在35団体が登録されております。（内１団体は居合・杖道）

大会：春季剣道大会（小・中学生　900名）・大宮剣道大会（一般　200名）・夏季錬成大会（小学生　300名）・冬季剣道競技会（小・中学生　800名）

講習会：初～三段受審者講習会（年３回）　四・五段受審者講習会（年１回）六・七段受審者講習会（年２回）女子講習会（年１回）　審判講習会（年１回）の事業を行っています。

稽古会：合同稽古会を、年末年始を除く毎週土曜日　大宮武道館にて開催

その他、小学生強化練習会を年３回程度、初心者剣道教室開催と幅広く活動を行っております。

３．今後の課題と目標　公益財団法人である埼玉県剣道連盟の支部として、青少年への剣道普及が第一義と考えております。しかしながら、一般会員（有段者）560名・小学生330名を有する県内でも大きな支部であるため、きめ細やかな活動には、やや支障をきたすところがあります。

この観点から、平成24年度に規約を一部改正し各区（大宮・北・西・見沼・岩槻）に剣道連盟を発足させ、本連盟の事業を補完できる体制をとりました。今後は従来にも増して、地域との連携をとりながら「剣道を通じた青少年の健全育成」を目標とし活動していく所存です。

行田市剣道連盟　－伝統を重んじ、理法を学んで人作り－

会長：加藤　輝男　　事務局長：伊藤　成行

沿革　行田市は城下町でしたので、明治18年に徳川家康を祭ってある東照宮神社（通称は権現様）境内で、近隣の剣士が剣道大会を行なった奉納額が現存しています。以来毎年剣道大会が行なわれて来ました。昭和20年の敗戦によって、剣道禁止令が出た時も、吉川　栄先生が小次愛次郎先生を招いて、剣道を行なっていました。

昭和28年に全日本剣道連盟が発足しましたので、直後に加盟致しました。東照宮の奉納大会には、毎年全日本剣道連盟の木村篤太郎先生が来賓として臨席していましたが、挨拶で「一源三流」の話をされたことや、異種競技戦として、剣道対銃剣道、剣道対薙刀等行なわれていた事が心の奥に一生忘れない思い出になっています。奉納大会が現在は行田市春季剣道大会として名称を変えて、第129回大会が５月19日に開催されました。1967年に埼玉国体が開催された時には、行田市が剣道会場になったことも、行田市剣道連盟の歴史のひとつとなっています。

事業活動　春季剣道大会は毎年約800名の選手の参加によって行なわれますが、他に市内の剣士を対象とした剣道大会を年間２回行ないます。埼玉県剣道連盟東部地区としての地区講習会、稽古会の会場としても参画致します。他に小学生、中学生を主体とした形講習会を年間２回、段級審査に向けての講習会や級審査を行なっています。剣道連盟として成人も含めて稽古会を基本的には月間２回を行なっています。

課題と目標　近年は少子化に伴なって、小学生、中学生の剣道入門者が著しく減少していますので、その対応について、総会、理事会等で、問題にしていますが、良い回答が出ていませんので、アドバイスがありましたら、御教示を賜わりたいと思います。しかし、成人の剣道愛好家はむしろ増加傾向にあるので、伝統を重んじて、正しい剣の理法を学び、技術の向上、礼儀、感謝の心、他人への思いやりを忘れず、世の中の役に立つような人作りが行なえれば、必ず剣道を学ぼうとする人が多くなると信じて、前進して参ります。

スポットニュース

「特別表彰者」に３氏受賞

―全剣連設立60周年記念顕彰―（２月11日）

○佐藤義則氏（他２名）　剣道授業事例集作成部会：「剣道授業の展開」に尽力

○大保木輝雄氏（他３名）　長期構想企画会議：「剣道指導の心構え」の制定に尽力
幼少年剣道指導要領改定作業部会（同上他６名）：「剣道指導要領」の発行に尽力

○村山千夏氏（他１名）　主催大会等において抜群の成績を収めた（高鍋　進氏と共に受賞）

「埼玉の剣道・この10年」（埼剣連60周年記念誌）編集委員会（中間報告）

＊編集内容（目次）・「この10年の足跡」（グラビア＆年度別主要行事＆各種大会入賞者等）・「各種大会の記録」・「全国大会開催記録」（59国体、東西対抗、インターハイ、全中大会）・「栄光の足跡（頂点に立った選手たち）」（八段選抜、全日本女子）・「各団体10年の歩み」（高体連、中体連、警察支部、居合道、杖道）・「埼玉の剣道」（剣道界を動かした人々、明治以降）・「少年剣道に託す夢」・「公益財団法人設立の経緯と４部会事業展開」・「武道必修化と埼玉県」・「剣道人口の動向（調査）」・「埼剣連事務局とＨＰの運用」・「竹刀の断面の研究」（2010学生科学賞、中学）・「歴代役員、範士・八段一覧」・「広報誌、“剣風”１～４号抜粋」－掲載順不同－

＊発刊・11月下旬、　Ａ４版・全110～120頁予定、各加盟団体に有償（実費）配布

「スウェーデン剣士の秩父訪問」

６月17日から19日までスウェーデン剣士６名が秩父を訪問し、熱心な稽古に汗を流しました。スウェーデン北部シェレフテオ市武道クラブ神武館の皆様で、今回の訪問は稽古と併せて建築が予定されている道場の資料収集を目的としていました。シェレフテオ市は秩父市とは産業交流都市の提携をしています。

メンバーは女性１名を含め剣道５段を筆頭に神武館道場代表、主席指導者、元国内チャンピオン、元国際武道大学研修生など剣道への情熱が高い面々でした。

秩父市から横浜に移動し、最後は国際武道大学での稽古を経て26日に帰国とのことでした。

「審判・役員団90余名の朝稽古」

関東高校（6/7～9、越谷）に意気を示して成功裡に幕

県高体連剣道専門部（羽田聡実行委員長他）の先生方の念入りな準備と万全な組織運営による立派な大会となった。特筆される点は、恒例行事とはいえ、２日間の朝稽古（５：00～市立浦和高）での気迫・気構え・気位を反映して審判に臨んだその心意気である。

大会を成功に導いた要因の一つとして紹介をしたい。

あとがき　公益財団法人化から間もなく２年が経過します。新体制からスタートした広報誌「剣風」も第４号の発刊となりました。これまでにたくさんの関係者から玉稿をお寄せいただき感謝申し上げます。今後も愛される広報誌を目指して努力して参りますので、ご協力をよろしくお願いいたします。　（池田）